

第九拾九号

瓦版99（卒寿）号によせて

1999年（平成11年）10月号創刊号を迎えて以来、今月号で99号になりました。有田からしん窯からささやかな情報発信ですが続けてきました。創刊号から13号まで社内のパソコン名人がひとりで担当し、読んで楽しい瓦版を作ってくれました。1ヶ月はあっという間ですが、様々なニュースを拾っていくと月日の流れよりも月日の重さをひしひしと感じます。14号から突然私（社長）に原稿執筆のお鉢が回ってきました。幸いパソコン世代であり編集名人の通称サッチャンとマンツーマンで作り続けました。コンビを組んで約7年。まもなく100号を迎えようとしています。女房から健康のためにずっと続けたいと言われていますが、100号で一区切りをつけたいと思っています。しばらく休んでまた再発行したくなるかもしれません。

以前、窯を焚きながら（具体的にはガス窯の炎を点検しながら）窯焼成記録表の片隅に窯焼きのおやじとしての思いや輝かしい有田焼の将来像を見据えて焼きものをつくる理念などを毎日綴ってきました。約16年間（1974（昭和49年）～1989（平成元年））窯焼き日記として今も大切に保存しています。

私のようにいろいろなモノやコトに首を突っ込むと、心の芯がぶれてしまいます。窯の職人さん達との信頼関係も生まれません。これではいけないと思い、文章化して指針を明確にするために習慣づけました。現在は、日常業務の中で窯あがり選別表や絵描座予定表の社長コメントに一言ずつ書き綴っています。生涯現役を自負している今、書くという作業から逃れる事はないでしょう。

車おろし

400年の昔から有田焼の新年の仕事始めを車おろしと言っていました。車とはロクロのことです。その昔、今の電動ロクロとは違って足で蹴って回すロクロでした。手と足の絶妙なバランスの職人技に魅了されていました。そのロクロを年末机に上げお餅を飾り、1年の労をねぎらったものでした。仕事始めはロクロをおろして土をのせ、初仕事に臨んだものです。今は電動ロクロですからロクロを上げたりおろしたりする事はありませんが、1年の始まりを表す意味で、最初の器を作る作業を車おろしと呼んで伝統を守っています。しん窯では、ロクロを勉強している職人さんが私を含めて7人もいます。来年1月7日（月）仕事始めは、神主さんの前で7人揃ってロクロをひいてみたいと思っています。

有田のお正月

来年は十二支のスタート子の年です。婦人画報新春1月号に、有田のお正月情景が出ていました。有田の名門深川家のお正月です。金沢・尾道・有田のお正月を、日本の伝統をベースにそれぞれの地域の特徴があって楽しく拝見させていただきました。今は師走。そして暮れ。日々の雑用に忙殺されお正月気分とは縁遠い今日この頃でしたが、婦人画報を見開きながら、有田の伝統産業であるやきものに携わっている現実を改めて自信と誇りを持ちました。世界のA R I T Aに生まれ育ちやきものを業とする窯元のおやじとして、行動する目標を明確に掲げて新しいスタートラインに臨まなければならないと思い、身震いする思いです。しばし深川家の優雅で格調あふれるお正月をバーチャルで体験し、心地よい気分には浸っていました。



真野さん来有

女優の真野響子さんが、ひょっこり来有されました。真野家とはかれこれ20年のお付き合いになりますが、有田のふるさと親善大使であり、こよなく有田を愛しておられます。今回は「有田童景」のエッセーを約半年間も新聞連載するそうで、準備運動として有田の空気に触れたいという取材旅行でした。「T A I Z O + T A K E O」「有田の匂い」展を見て、丸一日精力的に歩き回られました。初めて有田を訪れたのは1985（昭和60）年「泰造」のロケでした。くしくも武雄と有田で一ノ瀬泰造写真展が開かれている最中でしたので、「ラッキー」と言って喜んでおられました。私達も、全国いや世界に有田ファンを広げるために、日々お客様と良いお付き合いを続けなければならないとつくづく思いました。

今年の10大ニュース

- 大河ドラマ「風林火山」によせて（3月）
- 第5回青花匠ブランド橋口博之展 in 三越日本橋本店（3月）
- & 第1回青花匠ブランド橋口博之展 in 三越福岡店（8月）
- 親友が社長に（4月）
- 愛猫タマ逝く（8月）
- 青花まつり in ぎやらりいふじ山（9月）
- 第9期陶芸教室（9月）
- 秋のミニ市&秋の有田陶磁器まつり（11月）
- 有田焼大型ひな人形ギネス申請（11月）
- 有田焼大型ひな人形7段飾りフルセット完成（12月）
- 女優真野響子さん有田へ取材旅行（12月）